
ヨウジョ・ジャパン

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨウジヨ・ジャパン

【Nコード】

N9795Y

【作者名】

knight

【あらすじ】

勇太は幼馴染の彼女を助け、高い橋の上から落下して行った。

その落ちた先は……

第一節 美の探究（前書き）

どうか怒らないで、生暖かい目で見守ってください。
行ける所までは、毎日更新予定です。
宜しくお願い致します。

第一節 美の探究

彼は、その時熱く語っていた。

「ここに公言しよう。私は美少女が大好きだ！
こら、そこ！ 変態言うな！

良く見てみたまえ、あの完成された美しさを！
つばらな瞳、カモシカのような足。そして、キメ細やかなる美しき
素肌！

どれをとつても完璧ではないか！ あれこそ究極の美だ！」
両手を広げて熱弁している私に、呆れたような視線を向けているの
が若干一名。

「それ、ただ幼いだけじゃない。大体、女性の前でロリを熱く語る
こと自体がおかしいのよ。
この変態！」

「何を言う！ 私は決して変態ではないぞ。万人よりストライクゾ
ーンが広いだけだ！」
そう断言する私に、冷たい視線を送りながら言った。

「へえ……じゃ、オバサンでも良い訳？」
その言葉に、私は大きく溜め息をついた。
「君は何も判っていないな。最近の御姉様方をしつかりと見たまえ、
10歳は軽くサバ読める美しき淑女が何と多い事か！

これこそ日本の美学が発展している証だ！ 十分にストライクでは
ないか」

「あんだ、どんだけゾーンが広いのよ……」
完全に呆れ顔で目をそむけている。
「大は小を兼ねると良く言うではないか。

そもそも美を鑑賞していた私に蹴りを入れてきたのはお前ではない
か！」

それは、何処の台風かと思うほどに強く身体ごと横に押し流された。気が付けば、目の前に誰も居ない……ん？

いったい何処に行った？

橋の影にスカートの裾が見えた。

ような気がした……

だが、考えているヒマは無い。

間髪居れずに私は走った。

危なかった……

あわやと言う所で、その腕を掴む事が出来た。

これは……高い……

下を見れば、自動車やトラックがオマケのミニカーより小さく見える。

あまりの恐怖で、彼女は悲鳴さえ出せない状態のようだ。

こりゃ、落ちたら只じゃ済まないぞ……

慌てて周囲を見回しても、助けてくれそうな人影は無い。

参ったな……

ただ何で、ここだけ手すりが無いんだよ……

そう、手すりがあれば落ちるはずなど無い。

だが、何故か私達の居る位置だけ綺麗に掴まる物が無かった。

これって、犯罪行為だろ……

うつ……ちよつと待て……これは……マズイぞ……

私も橋から身を乗り出して片手で支えている状態だ。

そしてその柱は意外に太く、指に力を込める事が出来ない。

徐々に滑っていく……

やばい……このままでは二人とも落ちる……

腕力だけで粘っているが、そろそろ限界だ。

仕方が無い……最後の手段だ……

私は残りの力を振り絞り、振り子のように彼女を振った。

いーち、にーい、さん！

渾身の力で彼女を引き付けると、勢いよく橋の上に跳ね上がった。

「お前だけでも生きろ！」

力尽きた私が落下する瞬間、全てがスローモーションのように遅くなった。

ああ、本当にヤバい時はこうなるって聞いた事があるな。

そうか、これで終わりなのか……あっけないものだな……

ん？ 私を見ているのか？

今まで、あんな表情で見られた事なんてあったかな？

おや？ もしかして今すぐカツコイイ？

せめて最後の瞬間だけでも、彼女にカツコ良い所を見せられただけでも良かった。

先立つ不幸は許されないだろうが、これはこれで良い人生だった。

うん、もはや私に悔いは無い。

笑顔で見送る私に、彼女は叫んだ。

「出来る訳ないじゃないバカー！」

落ち行く私に向かって、彼女も一緒に飛び込んできた。

「うわ！ 意味ね……」

第二節 ニジ、どジ？

「もし……大丈夫ですか？」
ん？

助かったのか？

うお、頭痛て……

思わず頭を手で抑えながら、静かに目を開けてみた。

おお……美少女だ……目の前に美少女がいる。それも人気子役並みにカワイイじゃないか。

こんな美の究極に、一般ピープルが巡り会えるはずも無い。だったら、これは夢なのか？ やはり死んでしまったのか？

確かに、あの高さから落ちたのだ。死んでいて当然である。

そうすると、ここはあの世？

ならば、誰も咎める者は居なかつた。

もう、形振り構っている場合ではない。

これは千載一遇のチャンスである。

せめて、お友達にならなければ！

偉大なる光源氏よ！ 親愛なるナボコフよ！ 今こそ我に力を与えたまえ！

おもわず、前に身を乗り出して美少女の両手を握り締める。

「そこな美しいお嬢さん、ぜひ私と仲良くなつて下さ……」
後頭部に衝撃が走った。

「いいかげんにしなさいよ、この変態！」

どこかで聞いた声だ、妙に懐かしい……

「つてお前、何で居るんだよ！」

「こつちが聞きたいわよ！ 気が付いたらここなのよ！ 説明しなさいよ！」

そう言われても、私に解る訳も無い。

しばし首を左右に振り、ゆっくりと周囲を確認する。

「何も、わからん！」
また後頭部に衝撃が走った。

美少女が声を上げた。

「あ、頭にお怪我をされております。私の家に治療できる物があります。どうぞ付いていらしてください」

確かに、私の後頭部から血が出ていた。

まあ、今の所は他に何の当ても無い。私達は大人しく付いて行った。

その道中、三人で話しながら歩いていった。

美少女の名前は、マエカラ・キョウコ前唐教子と言うそうだ。

おいおい！ 日本人かよ……

だが、その後の言葉に驚いた。

「私は、教師をしております」

「はい？ 教師？」

この美少女は、何を言っているのだろうか？

何か血迷った？

もしかして、おままごと？ それとも妄想癖？

何だか良く判らないが、この場で変に否定しても仕方ない。

私達も、教子に自己紹介をした。

私の名前は、イmano・ユウタ今野勇太

そして私の後を追いかけて飛び込んだこの女性は、オイカケ・ヨウコ幼馴染の笈掛遥子

二人とも同じ学校に通う、ごく普通の高校生だ。

かなりの腐れ縁と言って、語弊は無いだらう。

まあ何となく付き合っているような雰囲気になってデートしたりしているが、

実はお互いにこれといった相手が居ないだけの話である。

まあ、そんな事情は話しても仕方が無いので、

当たり障り無い程度で紹介を終わらせたのは言うまでも無い。

何やら、街らしき雰囲気の所が見えてきた。
教子に案内されて辿り付いた先は、驚く事に美少女が溢れかえった
街だ。

なんだよ……ここ……

辺りを見渡しても、大人が異常に少ない。

それどころか、男子も見当たらない。

私にとっては嬉しい話ではあるが、ここまで美少女だらけだと不気
味でもある。

さらに、ここまで大量に居ては

美少女のありがたみさえも激減してしまうのは不思議な現象だ。

ここは、一体どうなってるんだ？

その時、遥子が冷たい視線で言ってきた。

「それで、何で私達はこんな所に居るわけ？」

その視線があまりに痛いのが、現状では何も答えようが無い。

「わからん……全く、わからん……」

それに諦めたような溜め息をつく。

「それじゃ、どうにもならないじゃない」

少しでも冷静になれるように、心を落ち着かせる。

「うむ、解っている。この状況は確かに尋常では無い。だが、今や
れる事は少ないのも確か。ここは出来るだけ多くの情報を収集する
べきだろう」

「それは、そうね……」

私達は、教子に案内されるままに家の中へ入っていった。

ここは、美少女ばかりの国。

その名も、ヨウジヨ国。

そのまんま過ぎて、もはや何も言う事が無い……

この人々は、我々のような大人の姿に成長しない種族だ。私が数人見かけた大人の姿をした人間は、どうも違う種族だそう。そして教子は、本当に教師だったようだ。知らなかったとは言え、失礼な事を考えてしまった……ちなみに他の国との交流は基本的に少ないそうだが、ここはその中でも最果てに位置する。この町を訪れる他の種族は限りなく少ないと教えてくれた。

怪我の治療を済ませた後に、お茶を用意してくれたのでそれを頂きながら私達の事情を話した。始めは話の内容を理解できなかったようでキョトンとしていたが、この事情が全くわからない旨を伝えると色々教えてくれた。

すぐに問題になりそうと言えば、生活に直接関わる身近な事柄だろう。

どんな話が出てくるのだろうか？ と興味津々に聞いていたのだが、話を聞いていくと不思議なくらいに違和感が無い。

何故か知らないが、私達の常識がかなり通用するようだ。文字がほとんど一緒ならば、貨幣価値もほぼ同じある。

そして何故か、エンの単位だった。

他の国は、ドルとかユーロになっっているらしい。

気持ちが悪いくらいの一致である。

まさかと思つて現金を見せてもらつと、さすがに同じではなかったが妙に懐かしい。

それは、まるでオモチャである。

どう見ても、子供銀行の紙幣と硬貨なのだ。

全く、ありがたみが無い……

おもわず二人で笑ってしまった。

教子が不思議そうな顔をしているので財布から現金を出して見せると、

「かつこいい！」と感動されてしまった。

まあ、ここでは使えないのだが……

しかし、そうになると教子が日本人のような名前も領ける。

ここは、感覚的に日本と考えても間違いでは無いだろうと言つ結論にも至つた。

こうなると、今の所は目立って苦勞を伴いそうな事柄は無さそうだ。私達は、ひとまず胸を撫で下ろした。

第三節 なに、それ？

今、全世界が懸念している問題があるらしい。

どうやら海を渡った先の大陸には、

ジヨシコーサーと言う恐ろしい生き物が居るといふ。

「女子高生？」私達は目を見合わせた。

私は教子に聞いてみる。

「その女子高生って、どんな生き物だい？ もしかしてこんな？」

遥子に向けた指は、思い切り平手で弾き落とされた。

おもむろに、教子が暗い表情で話し始める。

「実は、私達も見た事が無いのです。

勇敢な者達が何人も大陸に向かいましたが、帰って来た者は誰一人

としておりません」

「だが、放つて置けば問題は無いんだろ？」

私の言葉に首を振る。

「いえ、そう断定できません。と言うのもジヨシコーサーの勢力の

中で

最も恐ろしい存在が生まれ出たと言われています。

私達に伝わる予言が正しければ、いずれ世界は闇に包まれるでしょ

う」

途中の一言に引つかかった。

「予言？」

私が問うと、教子は声を低くして語り始めた。

「はい、それは……1999年の夏、サスペンスの帝王が降ってくる……」

る……」

船越が降って来てどうするよ……

「そして……逃げよ逃げよオチツイテ逃げよ……と有名な言葉を残

しています……」

避難訓練かよ……

「それって、当てになるのか？」

私の問いに、驚いて反論する。

「何をおっしゃいますか！ これは偉大なる予言でございます！」
何だかなあ？ 言う顔をしている私達に、さらに話を続けた。

「古の時代、ノセタラダマスと言う偉大な予言者がおりました」
また、いきなりイカサマ臭いな……

「彼は国王暗殺や大惨事を記した予言書を残しました。
これまでの歴史を見る限り、全て予言通りなのです。

そして最後の章に世界の終末を記した

ハリセンボンと言う予言を残しております」

おいおい……

「他にもホームシックレコードで未来を垣間見たと言う予言者もおりまして、

コモリウタと呼ばれる予言書を残しております。

それによればナマハーゲと言う恐ろしい闇の者が、
ワルイゴイネガなる強大な魔法で世界を滅ぼしたと記されています」

それは、ただの怖い夢だろ……

「我々に伝わる全ての偉大なる予言書が、その復活を示しているのです」

いや……聞けば聞くほどに信憑性が……

「それだけでは、ありません！」

話半分と言った私に、何だか教子がムキになっている。

まるで子供のようだ……

いや……見るからに子供なのだが……

「他の国にも予言や伝承があり、とても共通しています」

ほう……それは気になるな。

「隣の国では、ハリセンボンと同様のハルマキドンと言う予言も存在しているのです」

そう来たか……

「近年、新たにペロンチーノと言う者が世界の終末を予言しました」

まさか、食べ物シリーズじゃないだろうな……

「ウドガー・オイシーという者も未来を見ております」

旬の味ですか……

教子はさらに続きを語るうとしているので、さすがに私は切り出した。

「いや良く判った、予言は良く判った。もういいよ」

それに、目をキラキラと輝かせて

「やっと、判っていただけでしたか？」と聞いてくるので仕方なく

私は頷いた。

はい……聞いた私が、悪うございました……

第四節 どうする？

神妙な顔つきで、教子が私達に聞いてきた。

「あの、お二人はこれからどうするおつもりなのですか？」

それは、全く決まっていない。

いや、この状況で何も決めようが無い……

「どうしたもんだらうね……考えてはいるんだけど……」

私が困った顔で言うと、続けて教子が言った。

「もし、お二人さえ宜しければ冒険者になってみてはいかがですか？」

「冒険者？」

「はい。勇敢な者達の行方も判らない上に、それを調査する事も進んでいません。そこで国は冒険者を雇っているのです。」

なるほど、探偵みたいなものか……

「もし、お二人がその道を選ぶのであれば、私にも協力できる事はあります」

協力ね……

確かに、何の後ろ盾も無かろう現状でその提案はありがたい。

しかし、どうしたものだか……

私は教子に聞いてみた。

「ちよっと遙子と二人で、これからの事を相談していいかな？」

「はい、では私はお茶を入れ替えてきますね。ごゆっくりどうぞ」

教子は、ティーポットを持って部屋を出て行った。

さて、どうしたもんだらうか？

「なあ？ どう思う？」

遙子は、私の問いの答えた。

「いや、久々に笑ったわ。涙出て来たし」

「いや、そういう問題じゃなくてさ……」

思わず眉を顰めた私を見た遙子は、軽い溜め息をついてから言った。

「あれが本当の話かって事？」

「そうそう」

私が頷くと、遥子はどこか遠くを見つめた。

「あたしには、本当に思えないわね」

一呼吸置いてから、私はそれに答えた。

「だよな」……」

おもわず、溜め息が漏れる。

だが1つだけ気になるのは、誰も帰ってきた者が居ないって所だ。

これだけは事実として考えて良いだろう。

「まさか、行く気？」

遥子は、ただでさえ大きい目をさらに大きくして私を見ている。

「ああ、他にする事も思いつかないしなあ」……」

私が頼杖をついて嘆くように言うと、遥子も同じように言った。

「確かにそうね、生活基盤が無いのよね、あたし達」

「そうなんだよ……そこが大問題だ……」

小さく頷きながら答えた。

第五節 仕方が無いか……

湯気が立つポットを持って、戻ってきた教子に尋ねてみた。

「それで私達は、まず何をすれば良いんだ？」

「やる気になりましたか？」

何故か教子は、目を輝かせている。

そんなに嬉しいのだろうか？

「まあ、他にやる事が思いつかないしな。君が協力してくれるなら、私達としてはとてもありがたい」

目をキラキラさせて頷いている。

しかし何だ？ この変な違和感は……

「それで、どうやってその大陸に行くんだ？」

私が問うと、教子は話し始めた。

「それには、まずオバ山岳地帯を越えなければいけません」

今度はオバサンかよ……

「オバ帝国は、この大陸では一番に強大な戦力を持っております。

そして入国の際は、あらかじめカア殿下の許可をいただくことになります」

嫌だな、それ……

「そしてオバ帝国から、オバ傘下の共和国を横断いたします。」
横断したくないな……

「その先に、オジ三国があります」

オジサンも居るのね……

「オジ三国とは、穏やかな民のマス才族、頑固な事が有名なキギヨウ戦士族、

そして一番社交的なチヨイワル族が集まり1つの国になりました。

その先端にチヨイワル族が所有するパンツェッタ港があります。

そこからなら船が出せると聞いております」

何か知らんが、行く気が無くなって来た……

ちなみに、この世界では我々のような男や女と言う概念は無いらしい。

このヨウジヨ国では基本的に全員が女性で生まれて、状況次第で男性になる場合がある。

そして他には、生まれた時に性別がない種族もいくつかある。

それ等は、出逢った相手次第で男になったり女になったりするそう
だ。

自然の性転換かよ……どっかの魚みたいだな……

だが少なくとも、オジ三国のカップルだけは見たくない気がする……

さて、大陸に渡ったとして……

せめて、目指すべき者くらいは押さえておきたい。

今予言されている恐ろしい者は、フジヤ・マンバと呼ばれているそ
うだ。

確かに、怖そうな名前だ……

多分、それが魔王なのだろう。

だが、恐ろしいのはそれだけではない。

フジヤ・マンバにはフジヤ・マツチヨと言われる側近がいて、

その直属部隊である親衛隊が強敵らしい。

きつと、筋肉の塊りなのだろうな……

近年、勇者が魔物と戦った古い文献が、オジ三国で発見されたそ
うだ。

教子はその内容が知りたくて、教師の伝手を使って写本を手に入れ
た。

肝心の内容だが、あまりに長いので聞いているうちに疲れてきた。

まあ、話としては意外に簡単だ。

つまり、平和な世界にダンカイ・ノセダイと言う魔王が率いる軍団
が攻めて来たらしい。

それに勝利したのが、信神ルイ（シンジン・ルイ）と言う名の勇者だった。

極論ではあるのだが途中の長話は、財布を失くしたただの、ナンパをしたただのと……

私の言い方も悪いかもしれないが、どう聞いてもさほど重要には思えなかった。

だが何故か、割と最近の話に思えてならないのは気のせいだろうか？

それでも、途中で少しはマトモな話もあった。

勇者一行は、コジユウ塔の試練で強力な武器と魔法を手に入れたらしい。

そして、その装備と技が勝利の決め手となったそうだ。

となると、まずはそこを目指すのが妥当な選択だろう。

だが、コジユウ塔の試練と言葉が激しく気になる……

私達は、すごく嫌な気分に浸りながらも、まずはコジユウ塔を目指す事にした。

教子が、何か書いている。

「何を書いているの？」

私が訪ねると、ジャンっ！ とばかりに書いた紙を見せた。

「これは冒険者になる為の、推薦状及び許可章です。これをお城に持って行って、

魔王討伐と行方不明者の搜索を誓約する書類にサインすれば500万円の援助金が手に入ります。

さらに行方不明者を発見できれば一人当たり300万の報酬が頂けます。

そして私は、これを発行する資格を持っているのです」

私達は、目を丸くして見合わせた。

なんだそれ……いきなり500万って……

何か知らんが、凄い資格じゃないか……

「そんなに貰っちゃって良いの？」

「ええ、何しろ誰も生きて帰ってきた事が無いのです。このくらい当然ですよ」

何か笑顔で、怖い事を言わなかったか？ 今……

第六節 出発してみる？

ああ……… 出発前から憂鬱だ。

まず、名前が良くない。

何だよ、コジユウ塔って………

教子が、町の外まで一緒に来てくれた。

そして町の外にある道まで出ると、教子が何気に遠くを指差した。

「あれが、コジユウ塔です」

って近っ！

すぐそこじゃないですか、お嬢さん………

と言っても、冷静に見れば一山を超えるくらいはありそうだ。

しかし、山より高い塔とは凄いな。

私は、思わず聞いてみた。

「あれは、誰が作ったの？」

「サクラガ・キレイダを作った、パクチーと言う偉大な建築家と聞いております」

はい……… 聞いた私が、悪うございました………

私達は、教子に何かを手渡された。

何だ？ これ………

「それは、私達の国では旅の出発の時にお渡しする風習があります。お守りのような物です。」

どうか身に付けていてください
いっ寺？

そこに書いてある寺の名前を見て、二人で噴出してしまった。

「あの……… 何か、おかしかったですか？」

教子が、不安そうに見ている。

「いや、ごめん。ありがとうね、大事にするよ」

私が言っていると、安心したように笑顔に戻った。

「じゃ、行ってくるわ」

私達が軽く手を振ると、これでもかと言うくらいに手を振り返してくる。

それは、どこの子供だよ……

手の振り合いが三度目に突入した時、遥子が呟いた。

「終わらないわよ、これ……」

「だな……」

これでは、出発できるのかさえも怪しい……

この際、教子の事は放置しておこう……

私達は新たな道を切り開く為に、コジユウ塔へと向かった。

歩きながら遥子に、あの時どうして私の中から飛び込んで来たのか尋ねてみた。

遥子の話によれば、落ちて行く私は何やら眩しい光に包まれていたらしい。

それで、おもわず飛び込んだそうさ。そして死ぬとも思ってた居なかったらしい。

安易だ……あまりに安易だ……

生死を決定する瞬間に、普通は飛び込まないだろう……

その神経だけは理解できない……

「もう、二度と無茶はするなよ……」

私が言っていると

「あんたもね……」

冷たく、あしらわれてしまった。

どのくらい、歩いただろう？

遥子が、バテ始めている。

「少し、休憩するか？」

私が問いかけると、何も言わずに何度も頷いている。
こりゃ、キテルな……

私は休めそうな場所を探すと、そこに遥子を座らせた。

「大丈夫か？」

私の問いかけに、ただ手を上げる。

ダメだこりゃ……今にも死にそうである……

とりあえず、教子が持たせてくれた水筒のお茶を飲ませた。
何気にコジユウ塔を見ると、まだ半分くらいはありそうだが。
しかし、もうすぐ下りになるはずだ。

そうすれば、遥子も何とか付いて来られるだろう。

とりあえず、これは一日がかりになりそうだな……

辺りも暗くなる頃に、ようやく到着した。

目の前まで来ると、その大きさに圧倒されてしまう。

「デカイな……」

私が声を上げると、遥子が不安そうに答えた。

「本当に大きいわね……まさか、これを登るの？」

「そう言う事に……なるだろうな……」

私が言っていると、遥子はガツクリと肩を落としていた。

さて、とにかく入らなければどうにもならない。

こんな森の中で野営するよりは、遥かにマシなはずだ。

「まずは、扉を確認しよう……」

私が声をかけながら視線を向けると、その顔はすでにゲッソリしている。

「そうね……」

もはや能面のようなのだが……

大丈夫だろうか？

扉の前まで来ると、一度立ち止まる。

遥子は、私を抜いていった。

「おい！ ちよっと待て！」

私の声に答える事も無く、ユックリと振り返る。

「確認もしないで近寄ったら危ないぞ。すでに試練は始まっているかもしれないし……」

それに、糸の切れたマリオネットのように頭を下げた。

これでは、今日中に登り始めるのは無理そうだな……

「ちよっと待っていてくれ、確認してくる」

何とか立ってはいいるが、頭を下げたまま返事が無い……

この中に、休める場所があると良いのだが……

第七節 塔の攻略ね〜……

入り口を慎重に見て回るが、トラップのような物は見当たらない。だが、油断は出来ない。

私は隅々まで見て回った。

これ以上は、判らないな……入ってみるか……

その扉は、異常に大きい。高さは、3メートル近くあるのではないだろうか？

開くのか？ これ……

試しに扉を押してみると、全く反応しない。

では、引いてみようと思うのだが持つところが無い。

う〜ん、いきなり難解だぞ……

私が腕を組んで悩んでいると、扉が手前に少し動いた。

「え？ 何で？」

意味不明だ……

だが、これで扉を引けば開けられる事は確かである。しかし……

私は棒を拾ってきて、扉の隙間へと静かに入れてみた。

その時、突然に巨大な扉が轟音を立てて閉まった。

「やはり、そう来たか……」

挟んだ木が、見事に粉碎している……

危うく、指を持っていかれる所だった……

「ちよつと！ 大丈夫？」

その声に振り返ると、遙子が目を丸くして見ている。

「ああ、大丈夫だ。何か嫌な予感がしたんだ……手を入れて無くて良かったよ」

私が答えると、安心した表情になった。

さて、問題だ……
どうやって開けるべきか……
私が悩んでいると、また馬鹿にしたように扉が少し開く。
こいつは……完全に舐められているな……

私は塔の周囲を腕組みしながら歩き回っている。
別に、暇な訳ではない。

何か使える物は無いだろうか？

私は、周囲を探して回っていた。
ん？

これは、何故置いてあるのだ？

無造作に、ブロックが積んである。

ほう……なるほどね……

私は、とりあえずブロックを3個ほど扉の前まで運んできた。

さてと……

完全に人を舐めきった感じで開いている、扉の隙間にブロックを置いてみる。

やはり、さっきと同じように扉は轟音を立てて閉まった。

だが先ほどと違うのは、ブロック1つ分の隙間を残している事。

私は、そのまま待った。

しばらくすると、扉が動いた。

やはりな……

最初よりもブロック1つ分多く隙間が開いている。

「よし！ こいつは攻略できた！」

私は、さらに3つのブロックを持ってきた。

扉の隙間に1つづつ入れて行くと、やがて扉は人が入れる広さまで開いた。

静かに、扉の中を覗き込む。

「なんだ、これ？」

目に入ってきた内部は、ロウソクが灯っていて妙に明るい。

「誰かいるのか？」

その問いかけに反応は無い。

見渡しても、人影は一切見当たらない……

今度は、そう来たか……

激しく怪しい雰囲気だが、ひとまず入るしか道は無かろう……

「おゝい、塔の中に入るぞ」

私が声をかけると、遥子がとぼとぼ歩いてきた。

塔の扉を入ると、全体を見渡してみる。

落ちてきそうな物は……別段無さそうだな……

続いて床を確認して周る。

落とし穴も……無しと……

うぐん……次は、何で仕掛けてくる気だろうか？

中を歩き回ってみるが、仕掛けらしき反応は無い。

ここが、良いかな……

とりあえず、ここなら外の風にも吹かれないので良いだろう。

遥子をそこに呼ぶと、荷物を置いて座らせた。

「靴も脱いで、出来るだけ楽にしておかないと後で辛いぞ」

遥子はそれに頷いて、言うとおりにした。

ひとまず、このまま遥子が回復するまで休憩だ。

場合によっては、夜明かしも覚悟しなくては……

深夜の気温によっては、ブロックを挟んだ入り口の隙間がかなり痛い。

だが、あれを閉めてしまうという事は、自ら脱出ルートを塞いでし

まうような物。

最低限、それだけは避けたかった。

どのくらい経っただろうか？

いつしか遥子は、私の膝の上で寝息を立てている。

本当に疲れていたようだ……

まあ、慣れない山登りをして来たのだ。致し方が無い。

到着したのが夕方なので、感覚では4時間ほど経過しただろうか？

いずれにしても、ここでは夜中は寒くて寝ていられないだろう。

そして幸い、この灯りは切れる事が無さそうだ。

攻略は、何時からでも開始できる。

今のうちに、なるべく寝かせて置いてあげよう。

突然の身震いで、目が覚めた……

警戒するように、辺りを見渡してみる。

これは、参った……

どうやら私も、ウトウトしてしまったようだ。

先ほどと比べ、気温が相当に下がってきている。

かなり、夜も更けて来たのだろうか？

「ん？ あたし寝ちゃった？」

遥子も、目が覚めたようだ。

「ああ、5時間くらいは眠れたのかな？」

「え？ そんなに？ ごめん……」

「いや、気にしないでいいって。私も、少し寝ていたよ。

それに、上には何時からでもいけるしね」

遥子は、笑顔を浮かべて頷いた。

さて、これからは地味な戦略になりそうだ。

階段を眺めながら呟いた。

「この先も、気をつけた方が良くかもしれない……」
それに、遥子も頷く。

「さて……ぼちぼち、出発してみるか……」

私達は身支度を整えると、最初の階段をゆっくり上がり行って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9795y/>

ヨウジョ・ジャパン

2011年12月5日00時45分発行